

「アゲハの幼虫模型づくり (3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

幼虫の型紙をセロテープで袋状にしたあと、中にティッシュペーパーや脱脂綿を詰めて、立体的な模型に仕上げてゆく。最後に開口部を塞いでできあがりだ。



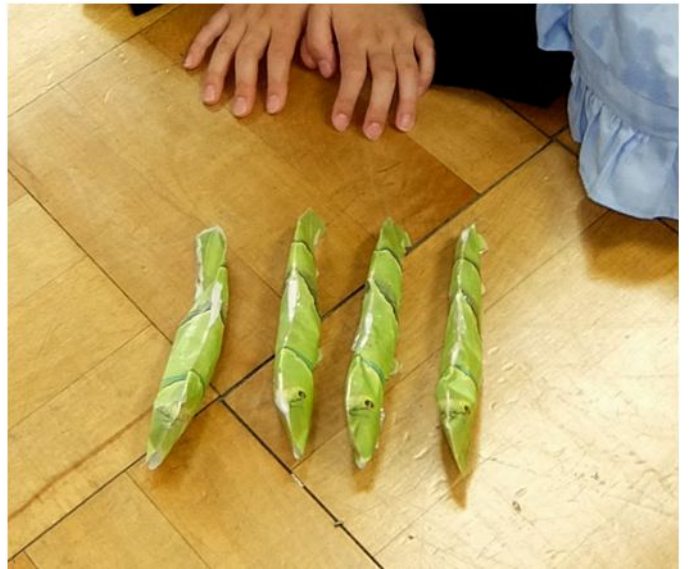
尾部の吸盤(偽足)の部分は、外側に開いて、裏側をテープで貼ると、床や手の上うまく立つようになる。しかし、これが細かい作業で、3年生の子どもには少々難しい。



できあがった「アゲハの幼虫模型」。印刷用紙は、薄い上質紙なので、うまく形を整えると、かなり実物の幼虫に近い形になる。もちろん、大きさは特大で、体積では終齢幼虫の50倍ぐらいある。切り取って、組み立てる作業で、幼虫の体の特徴をよく観察することができるのが、この教材のメリットと言える。



あんなに幼虫を怖がっていたこの子も、腕に載せて、すっかり「仲良し」になってしまった。吸盤の折り方、頭の持ち上げ方などを、実際の幼虫に近い形にしないと、うまく腕に載らないのが面白い。



子どものノートの振り返りに、この教材の有効性が見えている。

「私は虫がきらい。カブトムシとかダンゴムシみたいな、かたい(固い)虫はちょっといいけど、よう虫はむりです。でも、自分でよう虫のもけいを作って、なんとなくかわいいので、少し好きになりました。今度の日曜日に、アゲハのよう虫をさがしてみようかなって、思いました。」